

# わたしたちの平和宣言



あの日から78年。

現在も世界の3分の1近い国々が戦争や紛争など、争いをしているそうです。

苦しい思いをする人が世界中からいなくなる平和な世界を願います。

私たち派遣中学生にできることは、小さなことかもしれませんが、平和の実現に向けて一歩を踏み出します。

それぞれが平和の実現に向けて、平和宣言をします。



8月6日、何気ない一日の中で一つの原子爆弾が落とされました。それは一瞬にして広島を焼け野原にし、多くの人々の命を奪いました。誰がそんなことを想像したでしょう。その地にいた人は、一瞬にして人の命、日常、大切な場所を奪われ、多くの傷を負いました。それは、私たちには想像もできない絶望で、考えるだけでも心が苦しくなるようなできごとです。

ですがそれは、ただ記録の中に残るものではなく、実際に78年前に起きた紛れもない事実なのです。この光景はきっと地獄という他にないほどの絶望だったと思います。このことを忘れた人々はまた同じ過ちを繰り返し、きっと多く人が傷つけあうことになるでしょう。

私たちは、二度と同じ過ちが繰り返されないよう、戦争の恐ろしさや、平和の尊さを伝えていくことを、ここに誓います。

我孫子中学校 百海 恭吾・木村 碧良



私たち派遣団が広島へ行ったのは、2023年の8月10、11日ですが、原爆ドーム、平和記念資料館、本川小学校には、原爆が投下された1945年8月6日の記録が残されていました。

私たちは今回貴重な体験をさせていただいたと同時に、自分たちが現地に足を運び、学び、感じたことを多くの人へ伝える使命ができました。平和への意識を多くの人に持ってもらうには、なぜ戦争を行ってはいけないのかを知ってもらうことが必要です。

なので、今回の派遣を通じて、私たちが学び感じたことを自分の胸の中に閉まっておくことなく、できるだけ多くの人へ伝え、核の廃絶へ私たちのできる限りの行動をすることを誓います。

湖北中学校 太田屋 颯葉・深山 愛依梨



1945年、日本は戦争に敗れ、多くの人が夢と希望を失いました。しかし、わずか20年後には、焼け野原になっていた東京の街も復興し、東京オリンピックも開催されました。これは日本中の人々が復興に対する思いや願いを持ち続けていたから実現できたと思います。今、世界中で戦争が起きており、その多くが私たちには見えないところで起きています。もし、世界中の人々が平和に対する願いを持ち、そのなかの一人でも行動を起こせばそれが広がって大きな力になり、争いが減るはずです。

今年、私たちは広島に行き、戦争の残酷さを多く学んできました。そのことを派遣団の一人として、そして唯一の被爆国である日本人の一人として、後世に伝えていくことを誓います。そして、私たちは世界中の争いが一日でも早くおさまることを願います。小さな願いから大きな願いへ。

布佐中学校 浮谷 彪雅・市川 未来



あたり一面が強烈に明るい光に包まれた。次の瞬間、今度は炎と叫び声に包まれた。原爆は人々から様々なものを奪いました。当たり前にあった日々、家族、友人、数えれば切りがありません。それを知り、わたしたちと同じように毎日を過ごしていた人々からたくさんのものを奪った戦争がとても恐ろしく感じました。これ以上を戦争の被害者を増やしたくないと私たちは考えます。

しかし、今も世界各地で戦争や紛争があとを絶たず、これからまたいつどこで起こるかもわかりません。世界中に核弾頭は推定12,520発存在しています。今、核戦争が始まれば世界中にとてつもない被害が出てしまいます。戦争は他人事ではありません。今を生きる私たちが、考えなくてはならないことなのです。

そのためにも私たちは戦争の恐ろしさなどを後世に語り継いでいくとともに平和について考え続けていくことを誓います。戦争で亡くなった全ての方のご冥福をお祈りします。

湖北台中学校 木内 美希・茅野 葵



1945年8月6日8時15分、広島が人々の心が、命が、たった一発の爆弾で全てが壊されました。2023年、終戦から78年たち、広島には、深く傷がありましたが、広島の人々の努力のおかげで復興し、広島は今、発展していました。

しかし、人々の心は、命は、努力では決して戻ってきません。私は、派遣に行く前は、心のどこかで、「戦争は昔のこと」だと思っていました。しかし、戦争や原爆のことは決して昔のことではなく、今もなお、苦しんでいる人がたくさんいると、この派遣で学びました。このようなことを繰り返さないように、声を上げ、話を語り継ぐ被爆者の方もいらっしゃいますが、本人から直接当時の話を聞ける機会は少なくなってきました。

私たちは、この広島派遣を通して、この出来事を未来の世代までしっかりと伝えていくことを誓います。

久寺家中学校 坂本 大翼・石川 心愛



1945年8月6日午前8時15分、青空から落ちてきた一発の爆弾は、たくさんの人たちの心と人生を奪いました。あれから78年、2023年の今、世界は平和になったのでしょうか。12,000発以上の核兵器、各地で起こる戦争。世界が平和になったとは言い難いのが現状です。

では、この日本に住んでいる私たちができることは何でしょうか。原子爆弾の被災地へ訪れた私たち派遣中学生は、その答えを一人一人が感じてきました。核兵器の恐ろしさを世界の人々へ伝える。これが、全員が共通して感じた答えです。被爆者の高齢化が進み続ける今、その役割を担うのは、バトンを受け継いだ私たちです。このバトンをたくさんの人たちに渡し、世界平和の実現に貢献することを誓います。

白山中学校 小菅 新太・楠 梨衣子

# 令和5年度 平和事業の記録



▲「平和の集い」派遣報告を終えて



## 被爆78周年我孫子市平和祈念式典

日時 : 令和5年8月12日(土) 午後5時から午後6時

場所 : 生涯学習センターアビスタ ホール

司会 : 平和事業推進市民会議委員

早乙女 凜 (平成30年度広島派遣中学生)

山元 誠人 (令和2年度広島派遣中学生)

次第 : 開式の辞

千羽鶴の奉納

市長式辞

来賓挨拶・紹介

代表献花

黙祷

歴代派遣中学生による誌の朗読

根本 茜梨 (平成30年度広島派遣中学生)

我孫子市平和都市宣言の読み上げ

広島派遣副団長 湖北中学校 太田屋 颯葉

広島市派遣中学生の紹介・報告

広島派遣団長 湖北台中学校 木内 美希

参列者献花

閉式の辞

被爆78周年平和祈念式典は、台風の影響による悪天候が予想されたことから、室内での開催となりました。

参列した約100名は、原爆犠牲者に哀悼の意を捧げるとともに、核兵器廃絶と平和を祈りました。

原爆の恐ろしさや悲惨さ、平和の尊さを次の世代に伝えていくため、市では若い世代にも平和事業に携わってもらう工夫をしています。その一環として、司会進行を平和事業推進市民会議の高校生と大学生が務めました。

## ◆我孫子市長 式辞◆

本日は、被爆78周年平和祈念式典に際し、ご来賓各位並びに我孫子市原爆被爆者の会の皆様のご臨席を賜り、厚く御礼申し上げます。

広島と長崎に原子爆弾が投下されたあの忌まわしい日から78年が過ぎました。

原子爆弾は、一瞬のうちに多くの尊い生命を奪っただけでなく、辛うじて一命をとりとめた人々にも、心身共に生涯消えることのない深い傷を残しました。

原爆並びに先の大戦で犠牲となられた御霊に対し、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

今年で19回目となる被爆地への中学生派遣では、市内6校の代表生徒12名とともに、8月10日と11日に、広島市を訪問してまいりました。今年は、長崎市の平和祈念式典に参列する予定でしたが、残念ながら、台風の影響によって、式典への参列が中止となりました。派遣中学生に被爆地で学びを得ていただきたいと思い、広島市へ行くことを決定いたしました。広島平和記念資料館の見学や被爆された方からご講話をいただくなど、現地での体験を通じて、戦争や原爆の恐ろしさ、平和の大切さを、派遣中学生たちは学んでくれたのではないかと感じています。

来週、8月15日は、終戦からちょうど78年目の日にあたります。戦争体験者や被爆者の方々が高齢化するなか、同じ過ちを二度と繰り返さないよう、当時の悲惨な記憶と記録を後世へ伝えていくことがますます重要になっています。

我孫子市においても、被爆の実相を後世へ伝えていくために、長年にわたり平和事業に取り組み、市とともにこの平和祈念式典を開催してきた我孫子市原爆被爆者の会は、会員の高齢化に伴う会員数の減少から会として活動していくことが難しくなり、市が行うさくらプロジェクトの一環として、世界中で平和の象徴とされ植樹されている陽光桜を植樹することにより、活動を閉じました。本日は一般参加者としてご参列頂いている的山会長をはじめ我孫子市被爆者の会の皆様には市の平和事業に長年に渡りご協力を頂き感謝申し上げます。

我孫子市は、唯一の被爆国として、また、平和都市宣言をしている自治体として、今後も、核兵器のない世界が実現されることを強く願い、被爆者の方々の平和への思いを胸に刻みながら、広島や長崎に派遣された経験をもつ若い世代をはじめ、多くの方々とともに平和事業に取り組んでまいります。

結びに、日頃から市の平和事業にご尽力いただいております我孫子市原爆被爆者の会や平和事業推進市民会議、歴代の派遣中学生の皆様にご感謝を申し上げますとともに、本日は、ここにご臨席の皆様方のますますのご健勝を心からご祈念申し上げます、式辞といたします。

令和5年8月12日 我孫子市長 星野 順一郎

## ◆原爆に関する写真と平和祈念の折り鶴展・平和祈念のとうろうの展示◆

平和祈念式典の開催に合わせ、「原爆に関する写真と平和祈念の折り鶴展」をアビスタで開催しました。我孫子市原爆被爆者の会より寄贈された写真パネルと、市民の方々から集まった千羽鶴、これまでの市の平和の取組の紹介などを展示しました。

また、平和祈念式典に合わせて開催を予定していた「手賀沼とうろう流し」が台風の影響により中止となったことから、派遣中学生や市民の方々が思いを込めて作った灯籠を、千羽鶴などと一緒に展示しました。

<展示期間> 8月11日(金)～8月25日(金)

(とうろうの展示は8月12日(土)～8月25日(金))



## 平和の集い～我孫子から平和を願う～

日時 : 令和5年12月3日(日)午後1時30分から午後4時

場所 : けやきプラザ ホール

司会 : 平和事業推進市民会議委員

松丸 高大 (大学4年、平成27年度広島派遣中学生)

赤羽根 愛実 (大学3年)

次第 : 開会

主催者挨拶

我孫子市長 星野 順一郎

我孫子市平和事業推進市民会議 会長 桑原 俊晴

第1部 令和5年度派遣中学生による報告

第2部 我孫子中学校演劇部による劇

「不言色(いわぬいろ)の蛭」

派遣中学生による報告会は、派遣事業が開始した平成17年度から、標題を変えながら続いてきました。今年度は約250名が来場し、広島派遣報告と我孫子中学校演劇部による劇をご覧いただきました。中学生たちの発表に、多くの感動の聲が寄せられました。

この事業は市と我孫子市平和事業推進市民会議の共催事業で、準備や当日の運営を共同で行っています。また、司会を市民会議委員の大学生2名が務めました。



▲司会と平和事業推進市民会議会長挨拶



▲我孫子市長挨拶

## ◆第1部 広島派遣中学生による報告◆

令和5年8月に広島市に派遣した中学生が、現地で学び感じたこと、平和について考えたことなどを発表しました。派遣報告の最後は、中学校ごとの「平和宣言」で締めくくられ、中学生たちは自分の言葉で平和への思いを語りました。当日の発表は12名のうち10名で行いました。



▲我孫子中学校



▲湖北中学校



▲布佐中学校



▲湖北台中学校



▲久寺家中学校



▲白山中学校

## ◆第2部 我孫子中学校演劇部 「不言色（いわぬいろ）の蛍」

市内中学校唯一の演劇部である我孫子中学校演劇部は、平成25年から毎年、戦争や平和をテーマにした演劇を通して、観る人に平和の尊さを伝え続けています。今年も15名の中学生たちが一生懸命演じました。

<あらすじ>

この物語は、日本兵とひめゆり学徒隊の生徒の実話に基づき、特攻隊員として飛び立つ青年たちと、特攻隊員に最後に食べてもらう食事を作り続けた女性の心の交流を描いたものです。



## ◆「平和の集い～我孫子から平和を願う～」展◆

平和の集いの開催に合わせて、11月22日から12月3日まで、アビシルベとけやきプラザギャラリー1・2で展示会を開催しました。

アビシルベでは、長崎原爆資料館所蔵の原爆被災写真パネルや、市民の皆さんから市に寄せられた沢山の千羽鶴を展示しました。

けやきプラザのギャラリーでは、広島・長崎派遣中学生リレー講座の様子や、子どもたちによる“平和なまち”絵画コンテスト入賞作品（平和首長会議データ提供）、8月の平和祈念式典時に作製したとうろうなどを展示しました。



▲アビシルベの展示の様子



▲けやきプラザ 第1ギャラリーの展示の様子



▲けやきプラザ 第2ギャラリーの展示の様子



## 広島・長崎派遣中学生リレー講座「未来を生きる子どもたちへ」

実施期間 : 令和5年6月から令和5年12月まで

実施場所 : 市内の小学校13校(6年生対象、計32クラス)

講師・アシスタント参加人数 : のべ130人

広島・長崎派遣中学生リレー講座は、戦後70年記念事業として被爆地派遣経験者の学生たちが企画し、平成27年度に開始しました。広島・長崎で学び、感じたことを若い世代に伝え一緒に平和について考えてもらうため、自らが講師となり、内容を工夫しながら小学6年生に授業を行っています。

事業開始から9年間で8,700人以上の児童が受講しており、「リレー講座を受講したことをきっかけに派遣に参加した」という中学生もいて、平和のバトンが次世代につながっています。



▲R5.6.6 我孫子第一小学校





▲R5.6.10 湖北台西小学校



▲R5.6.17 新木小学校



▲R5.7.6 我孫子第四小学校



▲R5.9.30 布佐南小学校



▲R5.9.30 並木小学校



▲R5.10.14 布佐小学校



▲R5.10.21 根戸小学校



▲R5.11.10 高野山小学校



▲R5.11.22 湖北台東小学校



▲R5. 12. 1 我孫子第三小学校



▲R5.12.6 我孫子第二小学校



▲R5.12.11 湖北小学校

◆我孫子から平和を願う～我孫子市平和事業ブログ～◆

我孫子市の平和事業や平和事業推進市民会議の  
取組みを紹介しています。

令和5年度広島派遣レポートや、「平和の集い」の  
様子を映像とともに紹介しています。



<http://peace-abiko.blogspot.com/>

# 平和祈念文集



▲千羽鶴を奉納する我孫子市派遣団

広島派遣を終えた派遣中学生による感想文です。  
広島で学んだこと、感じたことを率直な自分の言葉で記しています。





### 『平和と戦争』

私は今回の派遣に参加するまでは、平和とは穏やかで戦争や争いのない環境のことだと思っていた。しかし広島に起きた出来事は平和というにはほど遠く、見て、聞いているだけでも胸をえぐられるような、現実とは思えないほどに恐ろしいことばかりだった。

原爆の被害を受けた建物や資料を見ているうちに、いかに原爆が多くの子供をもたらしただろうか。また、無差別に多くの人々の命を奪ったのかと、原爆について知れば知るほどに恐ろしくなっていた。原爆について学んでいく中で、私は少しでも多くの人々が原爆や戦争の恐ろしさ、そして平和の尊さを知り二度と同じ過ちを繰り返さず、戦争のない平和な世の中へ向けて歩いていくことが大切だと思った。

今回の派遣を通して私が一番驚いたことは、被爆地の生存者を苦しめたのが原爆の後遺症だけではなく、ほかにも原因があったことだ。原爆投下からアメリカなどの連合軍に支配されている数年間、原爆のことを報じることは禁止されていて、日本中の人々は原爆が投下されたことさえ知らなかったという。そのため後遺症に苦しむ多くの人々が差別を受け、物資の支援などもなく孤立した状態であり、治療すれば助かっただろう命や食料不足など、さらに多くの命を奪う原因となっていたことだ。驚きの反面、そのような理由で亡くなる人が多くいたことを知り、戦争の悲惨さをより強く感じた。

実際に被爆者の方の言葉で印象に残っているのは、「戦争が終わってもすべてが終わるわけではない。」というものだ。1945年8月15日に終戦したが、その後も後遺症や差別などが人々を苦しめ続け心に大きな傷を残していった。それらは想像するだけでも恐ろしく被爆者の恐怖や苦しみは、到底自分たちではわからないほどはかり知れないものだと思う。このほかにも亡くなった人が残した言葉を見て、戦争の実態や当時の状況を知りとても恐ろしく思った。

現地で原爆ドームや本川小学校、平和記念公園の慰霊碑などを見て感じたのは、原爆や戦争の残酷さと、恐ろしさだった。一瞬にしてあたり一帯が焼け野原になり、コンクリートでできた建物でさえ崩れ、その場にいた人の命を無差別に奪ったその光景はたとえようのないまさに地獄のようなものだと思う。

私は派遣を通して二度とこのようなことを繰り返してはならない、そしてこの戦争を決して過去のこととして考えてはいけないと強く感じた。なぜなら、今も戦争は世

界で起きている。それだけではなく、世界にはまだ約13400発もの核兵器が残っているうえ、そのうちの約4000発は命令があれば今にでも発射できる状況にあるからだ。だからこそ我々はこの戦争が起きて多くの人々が亡くなった事実をしっかりと受け止め核兵器の根絶と世界の恒久平和へ向けて歩み続けていかななくてはならないと思う。

平和とは何か、そして平和な世の中にするためにはどうするのが最善なのか。それに対して完璧な答えなどないのかもしれない。しかし今回の派遣を通して自分は争いがなく、人々が安心して、笑顔で生活できることが平和だと思うようになった。戦争が起きていなくとも何かに支配されている生活やいつ争いが起きるのかにおびえるような環境は平和とは言えないと思う。だからこそ世の中から争いがなくなり人々が安心して生活できるようになって初めて平和ということができると思う。

平和というにはほど遠い戦争や被爆について知り、現地に行ったことで平和の尊さや大切さをより一層強く感じられた。調べれば答えが出てくる時代だが、必ずしもその答えが正解とは限らない、だからこそすべての人が自分なりの平和を見つけて、その平和へ向けて歩いていくことが大切だと思う。

一人で戦争をなくすことなんてできない。それでも、多くの人々が平和を願い続ければ争いは減ると思う。だから平和への思いや考えを周りに広めていくことが大切だと思う。

実際に被爆地へ行き、戦争や原爆について学んだ私たちが、そのことを多くの人に広めていくことで、平和な世の中に少しでも近づくよう活動していきたいと思う。



『繰り返してはいけないこと』

私が、今回広島派遣に行って特に印象に残ったことは3つあります。

1つ目は、爆心地が一番近かった小学校の本川小学校で唯一生き残った清子さんのお話です。当時、清子さんには同級生で仲良しの高木さんがいて、清子さんはコンクリートの壁に囲まれた靴箱のところにいて、高木さんは外で遊んでいました。清子さんは原爆が投下されてもコンクリートの壁で奇跡的に助かりましたが、高木さんは原爆が投下されたことにより皮膚が黒く焦げて清子さんが名前を聞いてからやっと高木さんだと分かり、その後高木さんは近くの川に入ったが亡くなってしまった、という話です。私はこのことを読んでとても心が重くなりました。

なぜなら、原爆が投下される前はみんな今と同じように普通に生活していたのに、たった一つの原爆が空中で爆発したことによってその普通の生活だけでなく、大切な人の命も奪ったからです。そして本川小学校では、死体をそのままにしていると感染症が起きるので校庭で火葬を行い、その後校庭では運動会を行ったそうです。私はこのことを読んで、人のすごさを知りました。もし私がその場にいたら原爆のことをずっと引きずり、運動会に参加しようなんて考えないと思うからです。

2つ目は、広島平和記念資料館の中で見た「喉が渴き黒い雨を口で受ける女性」の絵です。そこには、あつくて あつくて からだ中が火のかたまりのようになっていたから 水がほしかった、と作者の言葉が残されていました。黒い雨は雨に油が混じったようなぬるぬるとしたものだそうです。その黒い雨は放射能を帯びており人体に悪影響を及ぼす雨でした。私はそのことを知ってとても驚きました。なぜなら、今は断水しない限りどんなときでも冷たい水や、温かいお湯が出てくるのが当たり前で、雨は透明で放射能を帯びた黒い雨は降ってこないからです。きっとこの女性はこの雨が体に害のあるものでも、ないものでも関係なくて、ただ自分を冷ますためだけに飲んでいただけだと考えました。そして生きるために放射能を帯びた雨を飲むことになった原因の原爆が、もう作られないでほしいと強く思いました。また、資料館には被爆したレンガの壁や三輪車、ヘルメットもありました。レンガの壁は黒く焦げている部分や、角の欠けている部分が多くありました。三輪車とヘルメットは何年も経って錆がたくさんあるもののように見えました。このようなものが一瞬でできてしまったことに今までに感じたことのない恐怖を覚えました。事前に調べて知っていたは

ずなのに自分の想像していた何倍も、何十倍も上回っていて、途中からメモを取ったり写真を撮ったりすることができなくなり、とても苦しい気持ちになりました。

3つ目は、アメリカが広島に原爆を落とした理由です。そこには2つの理由があり、1つ目は原爆がどれくらいの被害を及ぼすのかを調べるためにそれまで何も攻撃をせずに原爆を落としたこと、2つ目は、原爆によって戦争を終結させれば原爆を正当化できると考えたことです。しかもアメリカは原爆によってたくさんの犠牲者が出ることを知っていたそうです。このことについて私が思ったことは、まずどんな理由があったとしても一人一人に大事な生活があって、大切な人がいて、亡くなったらもう戻ってこないのに、無差別にその尊い命をただの実験のように奪っていくのはとてもおかしい、残酷だと思いました。それと同時に、「原爆を落とす以外の方法で戦争を終結させよう。」ということは考えなかったのだろうか、とも考えました。

私は今回の広島派遣を通して、今の日本がどれだけ恵まれていて平和になったのかがわかりました。けれど、今も世界には核を大量に保有している国があり、戦争をしている国もあります。私たちは世界で唯一の被爆国の一人として、あの時起きたことを他の誰かが経験しないよう、私たちから核の恐怖と戦争のもたらす言葉にできないほどの悲しみを伝えて、世界が今よりも平和になるようにしていくべきだと思いました。



『今回の広島派遣及び派遣に関する活動を経て』

まず私が今回の派遣についての感想文を書く上でひとつの言葉を軸としていこうと思います。それは「現実」です。この言葉をなぜ選んだのかということについては後々説明していきましょう。まず、最初に私がこの派遣で衝撃を受けたのは教科書と実物の差です。学校でも義務教育の社会の歴史という授業の過程で原子爆弾が投下されたという事実、そしてなぜ起こってしまったのかということ基礎知識として学びます。私はそうやって学んでいく中で被爆者の方々や起こってしまったことについて「かわいそう」だとか「大変だったんだろうな」という他人への同情という感情しか持っていませんでした。

「同情」というのは大抵の場面で落ち込んだり、決して気分や状況が良くなかったりするときに相手への励ましなどの良い意味で用いられます。ですが、この件については学校の授業で得ることができる「同情」という1つの言葉では到底済むようなものではないと感じました。やはり学校の学習だけでは足りないと感じました。

私が資料館や現地を見て思ったことそれは、「恐怖」です。こうしてみると、とてもありきたりでどんなところにもでも転がっているような感想のように感じとれるかもしれませんが、決してこの「恐怖」という感情はただのテンプレートのようなものではないのです。派遣の日程の中で私たち派遣団は一日目と二日目で二回、原爆資料館へと行きました。原爆資料館へと入っていくと最初は町並みや原爆が投下された瞬間を上空から見たCGなどがありました。このような展示物を見ていく中で数多くの家屋などが一瞬にして倒れたのだと思うと原爆のエネルギーの強さをより一層痛感させられました。そこまではまだ「同情」という感情を持っていました。

それからどんどん奥へと進んでいくとまた少し雰囲気の違いの違う展示へとやってきました。その展示には原爆の直後に撮られた被爆者の方の写真や、被爆して亡くなられた方の遺品、被爆した広島の色々なところや様々な人を描いた絵画などがありました。ここにきてこれらの展示物を見たとき私は初めて「現実」を見ました。教科書などに載っている資料とでは比べ物にならないほどの残酷さでした。資料館に入る前の「好奇心」という感情から、資料を見るところか、一時的に資料を見るのさえも嫌になるほどでした。

展示されている資料の中には、焼け焦げた服や原形がギリギリとどめてある三輪車などがありました。そんないくつもの資料の中でも私が見て特に残酷さを感じたのは、放射線の影響で肌が鱗のような状態になってしまうことがあるのですが、それを施術し皮膚から切り離したものが資料館に飾られているのです。それを見たとき私はほかの展示物とはまた違う感情を覚えました。それがどんなものかというのを言語化するのには、とても難しいものではあるのですが、気分が悪くなったりして苦しいような状況でした。

この様に資料館では様々な資料を見て、教科書には載っていない「現実」を見ることができたと思います。そして二日目の日程の中で実際の被爆者の方にお話を聞ける機会がありました。こちらの体験では資料館を見学するのとは違い実際に被爆した方からの意見という貴重なものを聞くことができました。被爆者の方にお話を聞いた中で「核を保有していない国の対応」というキーワードが出てきました。現在でも核を保有しているのは九か国、この九か国の行動も核への対応に対しては重要になってきますが、それよりも核を保有していない国が「多くの人で力を合わせることによって声を上げる」ということが大事だとおっしゃっていました。唯一の被爆国日本に生まれた身として、この言葉に対しては考えさせられるものが多くありました。

こうして無事日程を終え、我孫子へと帰ってきてこの感想文を書いているわけですが、ただ行っただけでなく次は伝える立場になります。そして、伝える立場になるなかで、大切にしたいと思うことは、「より正確に人々へと情報を伝えること」です。被爆者の方々の体験を百パーセントとしたとき、私たち話を聞いた人間たちが約五十パーセントを吸収できるとしましょう。こうして例えると見える事それは、現地へ行ってお話を聞いたり資料を見ても私たちが被爆した方々の百パーセントを感じることはできないということです。決して、本当に被爆したわけでもないですし、その時代に生きていたわけでもありません。実際に行った人たちがそれだけしか感じられないのなら、私たちが話して伝えるのでは、感じ取れるものというのは十パーセントほどと思った方がいいでしょう。そんな中でも、話を聞いている人たちに被爆者の方たちの感情をどれだけ感じてもらえるかが大切です。私は今後教えていく上で、自分が実際に行ってみてわかったことや感じたことをより多くの人により多くの被爆者の方々の感情を感じてもらえるよう伝えていきたいと、派遣に行き思いました。



『広島派遣を終えて』

私たちは8月10日から11日の二日間、原爆が投下された広島を訪れ、戦争、平和について考えて来ました。

数々の被爆地を巡った中で、私が特に印象に残ったことが三つあります。

一つ目は、一日目に私たちが広島に到着して最初に見学した本川小学校です。本川小学校は原爆が投下された被爆地に最も近かった小学校であり、原爆の被害を受けながらも、奇跡的に形が残った建造物なのです。そして本川小学校は、被爆当時の、原爆を受けた姿形を新しくすることをせず、塗装が剥がれ、鉄筋コンクリートがむき出しになっているところや、天井や壁に空いた穴も、あの頃のまま変わらず残されていたのです。私はこの惨状を生で見た時、まわりの建物と明らかに世界観が異なる様子と、この建物が壊れる前はごく普通の小学校であったことを想像して、本当に現実でこんなことが起こるのかと、息を飲みました。本川小学校は資料館となっており、原爆の被害を受けた物や、人の写真、体験談などが飾られていました。屋根瓦やガラス、缶詰めが粘土や石のようになっているところから、原爆の凄まじさ、恐ろしさが見て取れ、被爆された方々を思い胸が苦しくなりました。

二つ目は、一日目と二日目の二回に渡り見学した、広島平和記念資料館です。平和記念資料館では、原爆やその被害について、たくさんのことをより具体的に知ることができます。壁一面に貼られた被爆者の肌が焼け焦げた姿は、とても衝撃が大きく、見ていて悲しかったです。また、被爆者が、当時の様子を絵で表したものが、かなり印象に残りました。絵は、写真と異なり、実際に見た景色に加えて、被爆者自身が感じたこともそのまま表現されています。被爆の恐ろしさが、心を通して絵に残されていることを考えると、原爆は、被爆者の体と心どちらにも、大きな傷を残していったのだということを改めて認識しました。平和記念資料館には、たくさん亡くなった人の写真やもの、その人がどんな人であったかが書かれた場所がありました。そこには、花が好きな人、兄弟思いの人など、今の私たちと変わらないごく普通の人達がいきました。ごく普通の人達が、当たり前で過ごしていた日常生活と、希望ある人々の命が、一瞬にして無差別に破壊されてしまったという事実を目の当たりにして、私は心が苦しくなりました。

三つ目は、二日目の、被爆体験講話での清水さんのお話です。一日目は資料館にて、様々な人の被爆体験を見てきました。どの体験も言葉で言い表せないほど残酷で、辛さがとても細かく伝わってきました。そして被爆体験講話では、その原爆の体験談を被爆者本人から聞くことができます。今回お話をしてくださった清水弘士さんは、三才で原爆の被害にあい、熱線で家族が酷い怪我を負いました。母は清水さんを守り、頭に傷が付き、顔にメガネが食い込んでしまったそうです。何があったかわからない様子で、呆然と、それでもまた来るかもしれないという恐怖から、清水さんとお母さんは、火の海に囲まれながら安全な場所を探したそうです。幼い中でも、記憶に残るほどその光景はひどいものだったと、清水さんは語られていました。清水さんの話の中で、私が特に印象に残った話があります。それが、「空白の十年間」についての話でした。原爆の被害について、医者の方々は口々に、「あの時、十分な血、栄養があったら、何万の人が助かった。誰も助けてくれなかった。」とおっしゃっていたそうです。広島は、原爆を落とされたうえに、その惨状をなかったことにされていたのです。そのため、医療や生活支援は一切受けられず、自力で何とかするしかなかったそうです。また、原爆の実態が周囲に理解されていなかったことで、感染者呼ばわりされたり、すぐ死ぬ、変な子が生まれると差別されたり、就職や結婚でとても苦労したそうです。私は、嘘をつかないと人間の扱いをされなかった被爆者の方々を思い、その生きづらさに胸が痛くなりました。

この広島派遣では、私が知らない、原爆の恐ろしさを様々なところで感じる事ができました。世界には、広島に投下された原爆の威力を遥かに上回る、「核」が、一万発以上も残っています。78年以上前の出来事だからと、安心はできません。いつでも、同じことが起こる可能性は、十分にあるのです。私は、尊い命と平和を守るために、原爆での悲劇を、より多くの人に伝えるべきなのだと思います。そして、世界中の人類全員が、みんなの平和を願えることが、最も大切なのだと思いました。





『広島派遣で実感したこと』

僕は今回の派遣で、多くのことを学びました。その中でも、特に改めて実感させられたことがありました。

一つ目は、「原爆の恐ろしさ」です。原爆の恐ろしさは、前からある程度は分かっている“つもり”でした。しかし、原爆ドームなどの建物や原爆資料館の資料を見ると、自分の思っていた何倍もの原爆の被害の様子がそのまま残っていて、原爆を甘く見てはいけないと感じました。派遣中に、何度も原爆の恐ろしさを実感させられる場面がありましたが、その中でも強く実感させられた場面がありました。まずは原爆資料館の見学です。資料館の最初にあった原爆投下前の写真を見ると、今の東京ぐらいに街が栄えていて、この数年後に街がなくなってしまうと考えると、とても胸が痛くなりました。そして、原爆の落とされた後の街の様子を見ると、ほとんどの建物が倒壊していて、倒壊していない建物でも外壁などが崩れ落ちていました。また、被爆された方の写真や遺品を見ると、原爆による熱や爆風によって、大やけどを負っていたり、原形をとどめていない状態になっていました。それらを見て、原爆の恐ろしさを実感したと同時に、原爆の破壊力も実感することができました。

二つ目は、被爆者である清水さんのお話を聞いた時です。被爆者の方の平均年齢がどんどん上がっていく中で、被爆された方のお話を聞けるというのはとても貴重なことだと思いました。特に恐ろしさを実感したのは被爆後の後遺症についてです。被爆された方は、原爆から放たれる放射線によって、胃の中の粘膜がなくなってしまう、激しい下痢を起こしたり、血小板や白血球が破壊され、大量に出血してしまったりと、被爆してかろうじて生き残っても後遺症によって亡くなってしまう人も多いのです。原爆を落とした直後だけではなく、その後も何十年にもわたって人々を苦しめ続ける原爆の恐ろしさを実感させられました。

三つ目は「被爆された方のつらさ」です。先ほども書いた通り、被爆された方は、原爆投下直後はもちろん、原爆による後遺症により、長い間苦しみ続けました。被爆された方のつらさは被爆された方にしかわからないから、なかなか想像することができませんでしたが、今回の清水さんの講話を聞いて当時の状況を少しずつ想像することができるようになりました。清水さんの話を聞いていると、「労働力が足りなかったため、中学三年生以上の子供は強制的に働かされた」などと、原爆が落とされる前

からつらい思いをされていたことを改めて感じました。そして原爆が落とされた時のお話を聞いたとき、思わず「うわ…」と小声で言ってしまいました。皮膚が垂れ下がった人々、大やけどを負った人々など、当時の悲惨な状況が浮かび上がってきました。僕はこの話を聞いたとき、「いっそのこと、死ぬほうがましだな」と思ってしまいました。でも、裏を返せば経験したことのない自分が、死んでしまったほうがいいと思ってしまったということは、その状況にあってしまった人は、自分の思っているより何倍もつらい思いをしていたのだと思いました。そして、その状態になってしまった人はもちろん、その人々を見ている人たちもとてもつらかっただろうと感じ、改めて被爆された方のつらさを実感させられました。

僕はこのほかにも、色々な場面で、様々なことを実感することができました。そしてこの派遣で、戦争に対する意識がガラッと変わりました。今までロシアによるウクライナ侵攻のニュースや世界中の核兵器に関するニュースが流れていても「日本の事ではないし、どうでもいい」と思っていた時がありました。しかし、今回の広島派遣で原爆の恐ろしさを改めて実感すると、それらのニュースが他人事ではないと思うようになってきました。また、もう二度と核兵器を使用した戦争を起こしてほしくないとも思いました。

僕はこの派遣で原爆や戦争のことについてたくさんのことを学ぶことができました。この学んだことを次の戦争を知らない世代に伝えられるように、リレー講座にも積極的に参加していこうと思います。



『広島派遣を終えて』

私は当初、長崎に行く予定でしたが、天候の影響で広島に2日間行ってきました。広島では、原爆が落とされた様々な場所や色々な資料を見聞きして来ました。その中で、特に印象に残ったことは、2日目に聞いた被爆体験証言者の清水弘士さんのお話です。清水さんは3歳の時にお母さん、お父さんと、一緒に被爆しました。清水さんのお話の中でも印象に残っていることが2つあります。

1つ目は、「被爆者は死ぬまで戦争が終わらない」という言葉です。私はこの言葉を初めて聞いたときは、どうしてこのような言葉になったのだろう、この言葉をどのような意味で言っているのだろうと疑問に思いました。でも、よく考えてみると、どういう意味で言っているのかすぐにわかることでした。放射線や熱線、爆風などにあたってしまうことで被爆者は、『原爆症』という病気にかかってしまいます。これは急性障害と後障害の2つがあり、急性障害は、原爆が落とされてからすぐに症状が現れますが、後障害はのちに白血病や原爆白内障などを発症します。また、一度に大量の放射線にあたってしまうと、細胞が壊されてしまいます。こうなることで、年を取るにつれて、たくさんのがんが発症します。このがんで今も苦しんでいる人はたくさんいます。またこの放射線は、腸の粘膜をなくしたり火傷ができたりすることもあります。放射線は体全てを貫通してしまうのでとても怖いと思うし、これから戦争があったとしたら、原子爆弾だけは使わないでほしいと思いました。それとあの言葉は、体だけではなく心にも影響があるということも言っていると思います。ずっと心の中にある、原爆が落ちたあの日の記憶を思い出すと、心が締め付けられると思いました。清水さんが話していた言葉は、戦争が終わったとしても、後遺症としてたくさんのがんになってしまったり、考えたくないことを思うことで心もつらくなったりします。そんなつらいことが死ぬまで続くから、このような言葉になったのではないかと思いました。

2つ目は、『空白の10年間』です。この言葉を知っている人はあまりいないと思います。私も清水さんのお話を聞くまで知りませんでした。これは、広島・長崎の被爆者が何の支援もなく、ほったらかしにされた約10年間のことです。当時、日本を占領支配していたGHQ（連合国軍最高司令官総司令部）が発令した、広島・長崎に関する報道を禁止するという『プレス・コード』によって被害の実態が伝えられなか

ったため、そうになりました。この話を聞いたとき私は、自分が生まれていない時代にこんなひどいことがあったのは悲しいことだと思いました。この戦争の最初の攻撃は日本が起こしてしまいました。日本がこのようなことをするのは、なぜか疑問に思いました。そして当時は他の国に戦争を仕掛けるような国だったのかと幻滅しました。調べてみると、日本が攻撃を仕掛けた真珠湾攻撃を発端に太平洋戦争、第2次世界大戦が始まったとされています。それがアメリカとの関係を悪化させるきっかけになったようです。このような真実を聞いたら、この真珠湾攻撃を始めとする太平洋戦争が起こされなければ、第2次世界大戦が起きなければ、広島・長崎に原爆が投下されることはなかったのではないかと思います。

私が広島・長崎派遣に行って聞いたかったことは、被爆した人の話や復興の様子です。これは見に行って知ることが出来たので、派遣に行って被爆した人の話が聞けたことが、とても勉強になりよかったです。しかし、それとは反対に、話していた内容は、とても残酷で聞くことをやめたくなるようなものでした。これからのリレー講座では、私が見て聞いて学んだことを被爆体験者の方のようにには伝えられないかもしれないけど、わたしの話を聞いた人に、戦争の悲惨さや危険さ、原爆のこわさを知ってほしいです。そして、私の話を聞くことによって、平和の大切さや今、平和なことに感謝できるようになってほしいと思いました。私が現地で聞いたこと、体験したことを分かりやすく伝えられるように、もっと調べたり、学習したりしていきたいと思います。



『長崎への思い、広島への思い』

『のどが乾いてたまりませんでした  
水にはあぶらのようなものが  
一面に浮いていました  
どうしても水が欲しくて  
とうとうあぶらの浮いたまま飲みました』  
—あの日のある少女の手記から

私は、78年前の長崎で当時9歳の少女に起こった筆舌に尽くしがたい出来事に、涙が止まりませんでした。同時に戦争や核兵器の無い平和な未来を築くために、私たちが何か出来る事はないか考えるようになりました。

今年5月、G7広島サミットが開催され、世界の首脳が原爆資料館を訪れ、平和への思いを芳名録に記帳しました。国際情勢に不安定さが増す現在『平和の尊さ』について私たち一人一人が真剣に話し合う必要があると思います。なぜなら、お互いの立場を尊重し、相手を思いやる心を持つ事が「平和」への第一歩だと思うからです。

私は、平成の平和な日本に生まれ、戦争を知らない世代です。被爆地長崎を訪問し、自分の足で歩き、自分の目で見た事、自分の耳で聴いた事、感じた事、資料だけでは分からない「戦争や核兵器の恐ろしさ」、「平和の尊さ」を学び、平和のバトンを未来へ引き継ぎたいと思い、長崎派遣に立候補しました。

7月24日長崎に派遣されるメンバーと初対面。これから苦楽を共にする仲間達です。

8月6日「広島平和記念式典」のテレビ中継を見て家族で黙祷しました。式典には多くの小中高生が参列していました。3日後の9日は長崎平和祈念式典への参列と思っていた矢先、台風6号の接近に伴い式典が縮小され屋内開催となった事から長崎派遣は見送りとなり、代わりに8月10日から2日間の日程で広島へ派遣される事となりました。

8月9日には「長崎平和祈念式典」のテレビ中継を見て黙祷しました。長崎は大雨でした。

8月10日広島へ出発。新幹線は車両も座席も皆が離れ離れでした。旅程が急遽変更となり、職員の方々が私達のために大変な苦勞をなされたのかと思うと胸が熱くなりました。

広島は大都会の喧騒。路面電車で本川小学校に行きました。旧校舎の一部と溶けた瓦やガラス瓶等が残されており、静寂で時が止まっているようでした。相生橋を徒歩で渡ると平和記念公園でした。「みどり」が多く、周囲は建物が林立しています。原爆ドームに目を転じると、78年前には「死と焔のヒロシマのデルタ」が広がっていたのだと思いました。

公園内には、学校の慰霊碑が多数ありました。当時、この辺りでは何千人もの中学生が勤労働員中に被爆。一瞬で彼らの未来が奪われてしまった「残酷さ」を感じました。

次に広島平和都市記念碑の前で黙祷しました。記念碑内には34万人の死没者名簿が納められています。私は犠牲となられた方々のご冥福と核兵器の無い平和な世界の実現を一生懸命祈りました。その時、私の頬を「そよ風」が吹き抜けました。

広島平和記念資料館では、原子爆弾が炸裂した瞬間を描いた「8月6日の記憶（石谷龍司作）」が衝撃的でした。爆心地の地表温度は4千度に達し、放射線が長い年月にわたって人々を苦しめることになります。

2日目は、3歳の時に被爆された清水さんの被爆体験講話を聴講しました。

原爆投下時は室内にいたので熱線を浴びずに助かった。朝だというのに外は真っ暗だった。キノコ雲は上空からの写真では白だが直径4キロの町が一瞬で燃え上がって出来た真っ赤な火柱だ。

被爆者の方々は、あの時みんなと一緒に死ねばよかった。生き残ってこんなに苦勞をしなければならないのか、生活に困窮し、体もガタガタで苦しい。何十年経ってもいつガンが発症するか不安を抱えながら生きている。被爆者にとって戦争は死ぬまで終わらない。

また、報道統制によって10年間広島・長崎の惨状が秘密にされた事により、医療や生活の支援を受けられず、様々な差別や偏見に苦しみながらも生き抜いて来た。

極限の状態の中で必死に生き抜いて来られた清水さんの講話には、魂が揺さぶられるようでした。

日本への原爆使用は正しかったと考える米国人は投下直後の調査で8割に上り、現在でも半数を超えていて、原爆について日米の認識の差は歴然としています。

「戦争の記憶が遠ざかるとき、戦争がまた私たちに近づく。」と言われていました。

平和は祈るだけではなく、自分達で創り出してゆくものだと思います。

今回の広島派遣では、志を同じくする11名の仲間達と出会い、多くの貴重な経験や知識を得る事が出来ました。「核兵器を地球上から無くす」これが究極のテーマですが、先ずはリレー講座の手伝い等、自分が出来る事を一つ一つ着実に実行して行きたいです。

私達は「微力だけど無力じゃない」。



『生きていた』

私は派遣中学生として、平和の大切さや戦争の残酷さを「学ぶ」ではなく「感じる」ことを目的に広島派遣に参加しました。広島に派遣される前は、戦争や平和という大きな形のないものについて、ぼんやりとしたイメージしかありませんでした。戦争はいけないことであり、平和は大切に尊いものだという認識はあったのですが、実感が湧かなかったからです。本当に派遣に行ったら実感が湧くようになるのか疑問を抱いていました。

そのような気持ちの中、派遣の始めに訪れた「本川小学校」で私がハッとしたものがありました。まず、建物に入ったとき、原爆が投下された昭和20年8月6日からこの場所の時間が止まっているような感じがしました。また、展示物にあった針が8時15分を指したまま止まった婦人時計を見て、より一層、この近くに原爆が投下されたのだという意識が高まりどきりとなりました。

様々な資料や展示品の中で私の考えが変わったのは本川小学校について書いてある、とある年表でした。そこに書かれていた学校の授業の再開日が昭和21年2月23日、原爆が投下された日は昭和20年8月6日。原爆投下から7か月も経たないうちに授業を再開していたことに衝撃を受けました。広島で約14万人の人々が亡くなったとされており、その数のみでも原爆が相当な威力だったことが考えられます。その他にも想像もできないような被害があったと思います。そのような状況にも関わらず、学びを諦めず授業を再開したのです。

そこに私は残された人々の生きていく強さを感じました。よく耳にする原爆の被害情報から「被爆者はかわいそうだ」という印象を持ってしまっていました。しかし、派遣に参加してからはかわいそうではなくとても強いなという印象に変わりました。人の強さを感じたとき、人が生きていたことを感じました。原爆の被害にあったのは2023年の今を生きている私達と同じ、人なのです。当時を生き抜いた人を身近に感じたら次は、いかに戦争がつらいものなのか、広島の人たちの痛みが伝わってきました。約14万人の犠牲者はひとりひとりが生きていたと考えるとその数字がより重く感じられ、胸が苦しくなりました。そのため、私はあのような戦争はもう絶対に誰にも経験してほしくないと強く願っています。

今、ロシアによるウクライナ侵攻をはじめ、世界中では紛争が絶えません。犠牲者を増やさないために一刻も早くその戦いを終えるべきだと私は考えます。様々な事情

があるのだと思います。それでも戦争や人の命が奪われていくことをして良いとは思いません。戦争の後に残るのは被害と悲しみや痛みだけであり、問題の解決には至らないと私は思います。また、世界中の戦争を終わらせるために今、ひとりひとりが声をあげるべきだと思います。もしもまた大きな戦争が起きたら、終戦をした78年前よりも核兵器によって想像を絶する被害が出てしまいます。一瞬にして核兵器をなくしたり争いをなくしたりすることはできません。だからこそ少しずつの積み重ねがとても大切だと思います。まずは多くの人が平和について考えることがその積み重ねの第一歩だと考えます。そのようなきっかけを派遣に参加したことを活かして私は作っていきたいです。まずは、リレー講座や友人に派遣で感じたことを話すなどを積極的にしていきたいです。そして、この活動を通して次の世代へと平和のバトンをつなぐことが派遣に行った私の使命だと感じています。今の私は平和とは何かに怯えることなく、安心して楽しく過ごしていただけることなのではないかと思っています。私は世界中の人々が平和に暮らせるように一生をかけて平和を訴えていき、バトンをつなぐという使命を全うしたいです。





『被爆地で感じたこと』

私は戦争というのは身近ではなく、もう起こることがないものであろうという考えがありました。しかし、近年ロシアがウクライナに侵攻するというニュースを見て、日本の近くにある国で戦争が起きていることに非常にショックを受けました。そして、なぜ戦争が起きてしまうのだろうか、という疑問も生まれました。そんなとき、我孫子市の平和事業として、約80年前に日本で起きたことについて勉強する機会をいただきました。今回の広島のパラダイム体験を通して、学んだことを記していきたいと思えます。

広島に投下された原子爆弾の被害は、自分の想像を絶するほどのものでした。原爆が投下された爆心地の上空で爆発。広島空が真っ赤に焼けるのが想像できました。広島派遣の一日目の始めに、本川小学校を見学しました。原子爆弾の投下当時にあった小学校が形をとどめていました。学校の壁はすべて剥がれ落ち、ところどころ校舎の鉄筋がむき出しになっていました。小学校を見て、一目で原子爆弾の威力を見せつけられたように感じました。これは、実際に現地を見たことで、実感できるものだと思います。写真や絵だけでは、感じることはできないものでした。本川小学校の見学で、居森清子さんについての展示に、とても心を痛め、印象に残っています。どうして印象に残っているのかというと、清子さんはたった一人生き残った生徒だからです。小学校の校庭にいた子どもたちは丸焦げになってしまったのです。その中には、清子さんの友達もいたはずですが、自分が清子さんだったら、友達が命を落とす姿を目の当たりにすることだけで辛い、辛いだけでは言い表すことのできない感情が湧きだすのを感じました。14年間生きて初めての感情でした。

その後平和記念公園に行きました。たくさんの記念碑、慰霊碑を見ました。それらを実際に見て、本当にたくさんの人の命がたった1回の原子爆弾によって失われてしまったのだと実感しました。そして、同時に、これらの失われた命を大切にしていきたいと思うたくさんの人々の思いや願いもあるのだということをとて感じました。また、内部に数万柱の遺骨が納められている原爆供養塔を見ると、自然と手を合わせずにはいられない気持ちになりました。

2日目には、原爆ドームを見学しました。原爆ドームを初めて見た瞬間は、その迫力に目を奪われました。実際よく見ると、コンクリートの壁がボロボロで、鉄筋があ

り得ないほど横に曲がってしまっていました。見れば見るほど、今にも粉々に崩れ落ちそうな、危うさ、はかなさを感じました。平和記念資料館で原爆ドームの被爆前と被爆後の模型を見比べると、被爆前はとても頑丈でしっかりとつくられていたものだということが分かりました。この二つは本当に同じ建物なのかと思うくらいに、破壊されてしまっていました。でも、その後、被爆された清水弘士さんの体験講話を聴き、破壊されたものは建物だけではないのだということを強く感じました。清水さんのお話で特に、後遺症のお話が印象に残っています。原子爆弾が放つ放射線は、体の細胞を破壊し、がん細胞を形成するなどの病気を引き起こしてしまうと話していました。そして、その病により「死ぬまで戦争は終わらない」というのです。私は、被爆の後遺症がどれだけの被爆者の方々を苦しめてきたのか、その悲惨さを初めて知りました。核兵器投下は一瞬でも、被爆した人々の苦しみは一生なのだと理解しました。戦後、被爆についてよく日本国民に知らされることがなく、広島出身であるということだけで、結婚を拒否されたり、差別を受け続けたりした人もいたと聴きました。とても辛いことだと感じました。

私は、14歳である今、世界で唯一の被爆国にある広島を訪れ、本当によかったと思いました。今まで感じたことのない感情が湧いてきたり、実際に訪れて、目にしないと分からないことをたくさん学んだりすることができました。「命が一番大事である」ということは今までも分かっているつもりでした。しかし、広島に行ったことで、その本当の言葉の意味を理解できたと思いました。ニュースなどの映像でしか見聞きしなかった、戦争の恐ろしさを実感することができたのです。そして、私が実感したことを、周りの友達や多くの人に知ってほしいという気持ちになったのです。その気持ちを行動に移すことが、平和な世界を創る一歩につながるのではないかと思います。一人でも多く、私と同じ思いをもってくれるように、これからも学校で発表したり、平和のリレー講座に参加をし続けたりしていきます。そして、平和のバトンを次の世代の人たちにもつないでいきたいです。今回の広島派遣体験を今後の平和に関する学習の糧にしていきます。我孫子市のたくさんの方々の支えがあって、広島派遣に参加できたことに感謝しています。本当にありがとうございました。



『実際に見ることの大事さ』

私は広島派遣に行つて、戦争や原爆についてインターネットやテレビ番組での文字や動画だけで知ったつもりになっていたということに気づかされました。実際に被爆された方のお話を聞いたり、現地に行つて自分の目で見たりしたものは想像を遥かに超えるほど惨く、苦しいものでした。

広島に着いて最初に行つたのは本川小学校です。そこは現在も小学校として使われており、私たちは一角にある平和資料館を見学しました。実際に被爆した缶詰や服の展示などがされており、原形を殆どとどめていない姿に原爆の脅威を感じました。中でも私が強く印象に残つたのは当時本川小学校（本川国民学校）の児童でたった一人生き残つた居森清子さんのお話です。居森さんは靴脱ぎ場で被爆しましたが、爆心地の方向に校舎があり爆風や熱風を避けることが出来たといいます。校庭や校舎は火の海になっており、火を避けるため何人かの先生や友達と共に川へ飛び込み地面に足もつかない状態で浮いていました。途中何人もの遺体が川を流れ、友達が力尽き沈んでいく様子をただ見ていたといいます。それでも居森さんは決して生きることを諦めようとはせず、その後救助され無事生き残ることが出来ました。

私がもし居森さんの立場になっていたら、きっと体力や気力、生きようと思う力を失くし生きることを諦めてしまっていたと思います。「友達の分まで頑張ろう。」そう諦めずに思えた居森さんは凄いな、と心から思いました。

次に平和記念公園に行きました。周りを見ると青々と茂る木々が空を覆っており78年前に原爆が落とされたとはとても思うことが出来ないような景色に、人と共に植物の生きる力を感じました。

公園内で私が一番印象に残つた場所は、数多くある慰霊碑の中の韓国人原爆犠牲者慰霊碑です。私は派遣に行く前は原爆の犠牲になつたのは日本人だけなのではないかと勝手に思っていました。しかし慰霊碑には日本語ではなく韓国語で何人もの名前が刻まれていました。実際、原爆で亡くなられた韓国人の方は5000～8000人もいたと知り驚きました。ほとんどの方が徴兵や徴用、生活のために日本に渡らざるを得なかったと知り、言葉では表せないような何とも言えない気持ちになりました。生活のため、日本に来ることを余儀なくされ、祖国に帰ることもできないまま亡くなら

れてしまった尊い命が、せめて魂だけでも韓国に戻ることが出来たことを切に願います。

二日目は原爆ドームに行きました。私はテレビなどで派遣前から原爆ドームを画面越しに見たことがあったのですが、実際に前に立って見てみると思ったよりも大きく、いまにも崩れそうなのをどうにか補強して保っている、という感想を持ちました。周りには当時のまま保存された壁や天井などの瓦礫がぐるりと囲っていて、飛び出た鉄柱もひしゃげており、爆風や熱線の被害の大きさが目に見えてわかりました。しかし、原爆ドームの周りではジョギングをする人、楽しそうに遊んでいる子供たちがいました。今、原爆ドームは戦争の辛い思い出の一つではなく人々が集まる交流の場へと時代と共に戻ってきているのだと強く感じました。戦争は決して忘れてはならない事ではありますが人々の暮らしの中に溶け込み、うまく付き合っていくことも大事なことなのだと思います。

平和記念資料館では実際に被爆された清水さんの講話を聞きました。実際に被爆した人でないと分からない、貴重なお話を何個も聞くことができ、当時の風景があまりと目に浮かびました。

火事で亡くなってしまっていたと思ったお父さんが生きていて、せっかく再会できたというのにその後亡くなってしまったと聞いたときは天国から叩きつけられたような、言葉では表せない気持ちになりました。聞いている私がそう思ったぐらいなのに実際に体験した清水さんはどれほど辛かったのか、そう考えると胸がとても痛みました。

私はこの派遣を通して平和とは何なのか考えさせられる場面が多くありました。まだ自分の言葉で平和とは何か伝えることはできませんが、市の方も言っていたように一生をかけて考えて行きたいです。



『5年ぶりの広島で感じたこと』

爆心地で僕が感じたものは、5年前とは全く違うものでした。

子供達のボロボロの服、苦痛で染まった絵、そして原子爆弾が投下された日からほとんど姿の変わらない原爆ドーム。目にしたのは5年前と同じだったはずが、小学3年生から中学2年生になった僕は、さまざまな経験を積み、さまざまな知識を得て、それらに対し、戦争という大きな過ちの“恐ろしさ”を感じました。

5年前の夏休み、僕は祖父母が住んでいる広島市を訪れ、自由研究として原爆について調べ、まとめることにしました。平和資料館へ行ったり、被爆した祖父の体験を聴いたりして、原爆と戦争について知りました。いや、「見た」だけだったのかもしれませんが。今思えば当時小学3年生だった僕には、少し難しすぎた気がします。それでも行った方が良かったということは、明言することができます。あの歳だったからこそ、純粋な気持ちでその怖さを感じることができたと思っています。しかし、僕はそれで怖さ以外のことも知った気になっていました。

そして今年の夏、生徒会の僕に長崎派遣に参加する機会が与えられました。僕は、広島原爆についてはよく理解しているのだから、長崎を訪れて学ぶことが広島で学んだことと繋がり、より深く理解することができるのではないかと思い、参加することにしました。しかし、台風の影響で行き先が広島に変更されてしまったことを知り、僕は、広島の平和資料館などには行ったことがあるから、もう行く必要はないのではないだろうか、と考えていました。

ところが実際に広島へ行くと、その考えはあっさりと覆されました。今まで僕が全部知っていると思ったことは、そこで目にしたもののごくごく一部だったのです。あの頃は理解することができなかった資料が大半で、覚えていた資料も、この5年間さまざまな経験を積んだ僕には全く違うものを感じられました。5年前はただただ怖がることしかできていませんでした。しかし今回は違いました。資料とその背景とを結びつけ、当時の瞬間を自分の頭で再生し、そこにいた人々の思いを想像し、そこで初めてその恐ろしさというものを理解しました。目には見えないところに本当の恐ろしさはあったのです。そして再び来なければ分からないことがあったということに気づ

かされました。それと同時に、一度訪れただけで、戦争や原爆の怖さを知った気になっていた今までの自分を恥ずかしく思いました。

僕が今回訪れて感じた恐ろしさは、実際に被爆した人が感じた恐ろしさの比にはなりません。現地に何度訪れても半分も感じることはできないであろう、この恐ろしさを招いた原爆という過ち。では、この過ちをもう繰り返さないようにするためにはどうすれば良いのでしょうか。僕は『共感』してもらうことが大切だと思いました。原爆のあの恐ろしさを一人でも多くの人に発信し、自分の事のように感じてもらうことが必要だと思っています。人が行動するきっかけというものは感情が全てです。その感情を動かすためには、一番は現地に訪れてもらい、あの“恐ろしさ“を感じてもらうこと。しかし、それができる人は世界的に見るととても少ないでしょう。訪れることができた人は、周りの人にできる限り感じたことを伝えることが必要です。僕もその伝える側の一人として、一人でも多くの人に話をしていきたいと思っています。

幼かった僕は怖がることしかできず、知識を得た僕は恐ろしさを知りました。これからある国では徴兵される歳になった僕はどう思うのか、親になった僕はどう思うのか、ウクライナにいる僕と同じ歳の子供たちはどんな気持ちなのか。過去の過ちは常に僕たちに問いかけてくるのです。僕はこれからも広島・長崎への訪問を続け、歳を重ねるにつれて変わる自分のそこに対する思いを確かめていきたいです。

また、今日自分が暮らすこの日本の平和を大切に思い、守り続けていこうと思います。



『広島に行って』

広島に着き、最初に本川小学校を訪れました。一番初めに訪れる場所だったので、少し緊張しながら小学校に入りました。壁のコンクリートは剥がれ落ちていて、とても小学校には見えませんでした。本川小学校に入り、階段を下りた時に疑問が浮かびました。なぜ小学校に地下があるのだろうか？考えてもわからなかったのが、友達に聞いてみると「防空壕のような働きだったのではないか」という答えが返ってきました。なるほど、と思いました。それとともに、小学校に防空壕があるなんて、なんと恐ろしい時代だったのだろう、とも思いました。家にいても、学校にいても、常に空襲に備えなければならない。想像するだけで怖くなりました。

地下に入って、まず被爆後の広島の模型を見ました。模型のほとんどが、まっさらな平地になっています。模型を見て、たった数百メートル、山があるかないかなどで被害が大きく変わってしまうことがとても残酷だと感じました。

本川小学校で被爆したのにも関わらず、奇跡的に一命を取り留めた居森さんの資料を読んでいた時、思わず足が止まってしまう衝撃的な言葉がありました。「友達が黒焦げになっている」咄嗟にその光景を思い浮かべてみました。しかし、どんなに考えてみても意味が分からない、理解できないとしか思いませんでした。目の前に黒焦げの友達がいるという状況。その当時の居森さんの気持ちは、簡単に「つらいだろうな」と、言うてはいけないような気がしました。

広島平和祈念資料館で被爆体験講話を聞きました。この講話が、今回の派遣の中で一番印象に残っています。清水さんからは、実際に被爆した人にしか分からない貴重なお話をたくさん聞くことができました。その中でも興味深かったのは、『原爆後遺症』と『空白の十年』についての話です。

正直、私は原爆後遺症について、あまり知りませんでした。しかし、清水さんの話を聞くにつれ、原爆後遺症がどれほどの人を殺し、苦しめているかを知りました。清水さんは原爆後遺症に苦しめられた人の一人です。被爆直後は、下痢・吐き気・口内炎・倦怠感などの症状を引き起こす急性原爆症に苦しめられました。広島市のホームページによると、急性障害は、約5か月後の12月末にはほぼ終息し、原爆の影響はこれでおさまったと考えられました。原爆がもたらす影響は、これだけではなかったのです。私が特に恐ろしいと思ったのは、被爆して年月を経てから症状が出る原爆後

障害です。原爆後障害は主に、白血病・癌が発病します。発病するまで、白血病3～8年、癌5～10年頃に増加したと考えられています。原爆の熱線、爆風から生き残っても、年月を経た後放射線が発病し亡くなってしまいます。この事実がまるで、原爆からは逃れられない、と言っているようで恐ろしいです。

『空白の十年』という言葉は私は知りませんでした。空白の十年とは、広島と長崎の被爆者が、医療や経済的な支援を受けることができなかった約10年間の苦しみのこと。清水さんは、空白の十年について究明し、語り継ぐことを生涯の課題にしているそうです。どうしてこんなにひどいことが起きてしまったのか。それは戦後7年間、日本を占領支配したアメリカ軍を中心とする占領軍（GHQ）が発令した広島と長崎に関する報道を禁止する「プレス・コード」によってもたらされました。そして、日本政府もそのことに協力したのです。プレス・コードを発令したのはこれから日本を統治していく上での批判を避けるためだそうです。これを知り、原爆の恐ろしさを分かっていたからこそ発令したことが本当にひどいと思いました。原爆を発明し、作ったのだから、当然原爆がもたらす被害は一番分かっていたはず。後遺症で苦しめられる人々がたくさん出ることも分かっていたはず。それでも自分たちへの批判を避けるために、何千何万という人々の命を見捨てたのです。原爆についての番組や、記事は作られています。空白の十年についての情報はあまり触れていないように感じます。『空白の十年』についてたくさんの人に知ってもらうためにリレー講座で話していきたいと思っています。

現在、原爆についての知識が少しずつ広まっていると思う反面、課題もたくさんあると思います。派遣に行った後に、原爆をネタにした画像が炎上している、というニュースを見ました。原爆をネタにしていいはずがありません。また、インターネットでもそのような投稿を見かけました。とても気分が悪くなる投稿内容の上、コメント欄を見て驚きました。こんな投稿はやめるべきだ、などのコメントはほとんどなく、投稿にあわせて冗談を言っているコメントばかりだったからです。清水さんは核兵器をなくすためには、国籍関係なく、全世界の人々が平和を強く願うことが大切だ、とおっしゃっていました。しかしどうでしょう。平和を願う、とは真反対の現状だと私は思いました。私一人にできることは少ないですが、少しでもこのようなことをする人が減って、平和を願う人が増えるように頑張っていきたいです。